

茅ヶ崎市 小学校外国語教育ガイドライン

*Guideline for foreign Language Education of Elementary School
in Chigasaki*



令和2年4月版
茅ヶ崎市教育委員会

茅ヶ崎市小学校外国語教育ガイドライン

～『茅ヶ崎市小学校外国語教育ガイドライン』について～

令和2年度から全面実施される新学習指導要領により、これまで小学校高学年において実施されてきた外国語活動が、教科として「外国語」となり、中学年に新たに「外国語活動」が導入されることになった。日本の外国語教育における大きな転換期を迎えるにあたり、各校における研究推進の必要性が高まってきている。

そこで、各学校において、子どもたちにとってより有意義な外国語教育が実践されることを願い、「茅ヶ崎市小学校外国語活動ガイドライン（移行措置期間暫定版）」の見直しを図り、『茅ヶ崎市小学校外国語教育ガイドライン』を作成した。

茅ヶ崎市教育委員会は、本ガイドラインを、小学校における外国語教育を行う小学校の教員だけでなく、中学校英語科教員にも配付し、本市の小・中学校の外国語教育を通じた連携を一層進めていきたいと考えている。

1 小学校学習指導要領（平成29年3月 文部科学省）

○外国語活動 目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- （1）外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
- （2）身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
- （3）外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

○外国語 目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- （1）外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

(参考)

○中学校 外国語 目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

2 小学校外国語教育の目標（茅ヶ崎市）

英語を通して、相手との関わりを大切にしながら、お互いの思いや考えを伝え合う体験を積み重ねることで、コミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を育成する。



外国語の学習を通して、「相手意識」を大切にして英語を用いてコミュニケーションを図ることができる『よりよいコミュニケーター』を育てる。

3 小学校外国語教育が目指すもの（茅ヶ崎市の基本的な考え方）

○教育課程の中の位置付け

⇒小学校外国語教育は、各学校において学校教育目標との関連をもって実施するものである。

○体験を通して慣れ親しむ

⇒英語のスキルを教えるのではなく、コミュニケーションの体験を通して外国語に慣れ親しませる。

○言語活動の工夫

⇒コミュニケーションを行う目的や場面、状況を意識させて言語活動に取り組ませる。自らの思いや考えなどについて、英語で表現させる機会を多く取り入れる。

○異文化理解

⇒異なる言語や文化に体験的に触れさせることで、多様性を受け入れ理解しようとする態度を養う。

○学級担任の積極的な関わり

⇒コミュニケーション能力の育成を主な目的とする外国語の授業においては、学級の雰囲気やベースになる。児童の実態に合った活動を進めていくために、小学校英語専科担当教員、ALT、小学校外国語教育支援員等を活用しながら、学級の児童をもっとも理解している学級担任が授業計画や実践に積極的に関わっていく。

4 具体的な進め方

- ・文部科学省から提示されている学年ごとの年間指導計画例・学習指導案例等を参考にしたり、本市で採用した教科書発行社等が作成した年間指導計画等を参考にしたりしながら、児童の実態と各単元の目標を意識した学習を設定する。
- ・中学年は文部科学省作成の児童用冊子 **Let`s Try!** を高学年は教科書を有効に活用しながら、各学校のこれまでの実践を生かした活動を工夫する。
- ・1 単位時間は45分とするが、各校の実態に応じて、内容を吟味した上でモジュール（短時間学習）や60分授業を設定することも可能とする。

5 評価について

評価については、文部科学省から、今後示される学習評価に関する参考資料を基に、学校毎に評価規準を作成し、指導と評価の一体化を図りながら行っていくことになる。

新学習指導要領では、3・4年生の外国語活動は「言葉による評価」を行うことになるが、5・6年生の外国語科は「数値による評価」と示されている。

外国語科の授業は、観点別学習状況の評価では十分に示すことのできない、児童一人一人のよい点や可能性、進歩の状況等について、日々の教育活動や総合所見等を通じて児童に積極的に伝えることが重要である。また、3つの観点については、毎回の授業で全てを見取るのではなく、単元や題材を通したまとまりの中で、学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てていくことが重要になる。例えば、単元の途中に児童を評価するいわゆる形成的評価を取り入れることにより、子どもの興味・関心を引き付けながら、多様な学びのプロセスを捉え授業を進めていくことができると考えられる。さらに、授業後の振り返りカード（自己評価）の活用は、児童自身が授業におけるめあてを設定するための指針となる。併せて「思考・判断・表現」の項目を自己評価させる欄があると、「知識・技能」を活用していく重要性を児童自らがわかるようになる。さらに、授業で扱ったワークシートや作品などの成果物や、ふりかえ

りカードなどの学びのプロセスを表すものをファイルとして蓄積し、それらを子どもの学びの姿として評価する方法（ポートフォリオ評価法）の活用も考えられる。このように多面的な評価を組み合わせることにより、より客観的で質の高い評価が可能となる。実際の評価にあたっては、文部科学省から示される、「評価に関わる資料」を踏まえ、各学校における適切な評価規準を設定していくことが大切である。

「知識・技能」の評価

他教科と同様に、「活用できる」知識・技能として位置付けられている。テーマに関連した基本的な語彙や表現について、日本語との違いについて気付いているかどうか、またコミュニケーション活動を行うための知識として活用できているかどうかを確認していく必要がある。単に知識や技能を「もつ」という習得でなく、習得の場面においても、実際のコミュニケーション活動を通して「できた！」という達成感を味わわせながら、「活用できる知識、技能」として習得させることが大切である。必要に応じてペーパーテストを行うことも考えられるが、その際は実際の言語場面を意識した問題設定が望まれる。

「思考・判断・表現」の評価

外国語科における「見方・考え方」において、目的や場面、状況に応じて「思考力・判断力・表現力」を活用しながらコミュニケーションを行い、自分の気持ちや考えを伝え合っているかという観点が評価すべき点になる。筆記テストのみならず、インタビュー（面接）、スピーチ、簡単な語句や文を書くこと等のパフォーマンス評価や活動の観察等、多様な評価方法から、それぞれの場面における児童の学習状況を的確に評価できる方法を選択して評価することが重要である。例えば、教科書の単元の最後には、発表（スピーチ）やコミュニケーション活動がアクティビティとして位置付けられているが、それらを「パフォーマンス課題」として設定し、その活動における児童の学びの様子を丁寧に見取っていくことが考えられる。そのような、実際に起こりうる状況を設定した文脈の中で、児童が自分の思いや考えを伝え合うことができるかについて、「思考・判断・表現」の観点で評価していく。また、その観点において、児童に望まれる姿について具体的に示す評価基準表（ループリック）を設定することが望まれる。発表ややりとりにおいて、児童が「目的や場面、状況に応じて」、「相手に伝えようと工夫して」等、当該単元の表現や語彙のみでなく、伝え合うために既習事項を組み合わせている姿を見せた場合、高く評価することになる。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

外国語科においては、相手意識を持って活動に参加しているか、自分の学びを省察し、次の学習への見通しをもって粘り強く取り組もうとしている姿があるかを見取ることが重要になる。そのためには、単元構想や授業構想の段階において、予めそのような姿を見取る機会を組み込んでいく必要がある。具体的には、相手意識をもち、相手に理解してもらうための工夫や改善をする課題設定になっているか、また発表の練習の前後で、子どもが発表のメモを加筆修正している場面などが見られた場合、加筆修正しようとした理由について問いかけを行うなど、自らの学びを省察できるようなフィードバックや振り返りの機会が設定されているかというように、単元構想の段階から、評価場面や働きかけを設定しておくことが大切である。

6 授業を行う上での留意事項

○「どのような人材を育成したいのか」「外国語で何をできるようにさせたいのか」という明確な目標を基に、そのために小学校における外国語科の学習で必要な内容について考えていく必要がある。本市における目標としては、「外国語の学習を通して、「相手意識」を大切にして英語を用いてコミュニケーションを図ることができる『よりよいコミュニケーター』を育てる。」ことが示されている。これを基に工夫して授業作りをしていくことが望まれる。

○「主体的な学び」の実現

子どもたちが主体的に学習していくには、単にモデル対話を暗記させて会話させるのではなく、子どもたちが、「伝えたいこと」を「伝えたい相手」に「伝えようとする」目的・場面・状況を明確に設定し、「内容のある・必然性のある」コミュニケーションを図らせることが大切である。

また、単元や授業のはじめに、ねらいや流れを提示し、授業の終わりに振り返りをさせることで、子どもたちが、学習の見通しを立てたり振り返ったりする場面を設定する。

さらに、子どもたちが興味・関心をもって学習に取り組めるように、子どもたちの発達段階に応じて、身の回りのことや他教科・領域の内容、社会や世界との関わり等を意識した題材を設定することが効果的である。

○「対話的な学び」の実現

子どもたちがスムーズにコミュニケーション活動を行えるようにするためには、ある程度の語彙や基本表現の理解は不可欠であり、ICT 機器を活用して正確な発音を聞くことに慣れ親しませたり、モデル対話を一定程度繰り返し練習したりすることも必要である。また、繰り返すことだけでなく、言語活動の中で自分の「言葉」として、相手に伝える場面を設定することも大切である。加えて、子どもたち自身の考えや気持ち、お互いに知らない情報等を伝え合う活動を設定することで、やりとりから相手のことを知ることを通して、言葉でコミュニケーションを図る楽しさを感じることができる。

さらに、相手の考えや気持ちを知ったときや、相手に自分の考えや気持ちを伝えたときに感じたこと、または考えたことを振り返る場面を設定することで、子どもたちは言葉でコミュニケーションを図る楽しさだけでなく、その大切さに気付くことができる。

○「深い学び」の実現

コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確にし、聞いたり読んだり、話したり書いたりする必然性のある活動を設定し、コミュニケーション活動を通して、子どもたちの「もっと知りたい、わかりたい、話したい、書きたい、読みたい、聞きたい」という気持ちを育てることが大切である。

また、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱をバランスよく育成することを意識し、年間指導計画、単元計画を作成することが大切である。年間指導計画、単元計画の作成においては、学習指導要領に示されている目標を理解し、小・中・高の各学年を通して育てたい力を意識しながら、どの場面でどのような力を身に付けさせるかを考えることが必要である。

○学級担任が中心

授業を行うのは基本的に学級担任である。他教科における学習、子どもたちの実態をもっとも理解

している学級担任だからこそ、子どもたちの発達段階に応じた授業の展開が期待できる。ALT や専科教員がメインとなり行う授業であっても、その授業計画から学級担任が積極的に関わることで、より子どもたちの実態に合った効果的な授業が期待できる。また、教師と児童、児童同士のコミュニケーション活動が主となる外国語教育において、学級の雰囲気が大変重要であることから、日頃からの学級経営が大切となる。

○ICT機器の積極的な活用

音声教材や映像等を効果的に使用することで、ALT がいない授業であっても、子どもたちはネイティブ・スピーカーの英語に触れることが可能である。さらに、タブレット、プロジェクター等の ICT 機器を効果的に使用することで、学習効果を高めることが期待できる。

○クラスルームイングリッシュ

授業者が使うクラスルームイングリッシュは、子どもたちのリスニング能力を高めることよりも、「英語の授業の雰囲気づくり」としての効果がある。さらに、教師が積極的に英語を使うことにより、子どもたちの「理解しようとする態度」を育てるとともに、教師の存在そのものが、英語を使うよいモデルとなる。そのため学級担任が、授業のために自身の英語力を高める努力をし続け、その成果が毎回の授業で、少しでも表れたとき、学級担任が英語の「モデルラーナー (model learner)」として子どもたちの良い手本となることが期待できる。授業者が発音や使用する英語に自信がない時は、支援員や ICT 機器を積極的に活用し、準備して授業に臨むことで不安を払拭できる。また、子どもたちと共にクラスルームイングリッシュの語彙を蓄積して、模造紙に掲示したり、クラスのオリジナル辞書を作ったりすることにより、繰り返しの活用ができ、子どもたちに自然と語彙が身に付くようになる。

○発達段階に応じた質の高いインプット活動

学習の初期段階では、より多くの英語を聞かせて慣れさせることが大切であり、ALT や CD・映像等の音声教材等を効果的に活用し、子どもたちにたくさんの語彙や表現を聞かせる機会を繰り返し作ることが大切である。その際、子どもたちの発達段階に応じて、使用される語句やスピード、内容等に留意する必要がある。

○他教科での学習内容や子どもたちの経験を生かした題材

子どもたちの関心・意欲を高め、主体的に学習に取り組めるよう、他教科での学習内容や学校行事、地域の特色を生かした取組等における経験を生かして題材を設定することが大切である。小学校段階だからこそできる題材を、学級担任だからこそもてる視点で工夫していきたい。

7 各学校における取組について

○校内研究等の積極的な実施、校内研修の充実

全職員の外国語教育に対する理解を深めるとともに、外国語教育の質の向上を図るため、外部講師や指導主事、専科担当教員等を活用して研修会や授業研究等を積極的に実施する。研修会については、ALT の活用や近隣の中学校の英語科教員の参加や協力を依頼するなど、各学校の実情に応じた効果的な研修になるよう努める。また、外部での研修に参加した教員が、各学校において、研修の成果を他

の教員と共有できる体制づくりを進める。

○小学校外国語教育支援員の活用

各学校に配置している小学校外国語教育支援員については、「授業づくりの支援」という役割であることを意識し、授業に入ることのみではなく、教員との打合せや ALT との確認の時間を確保することができるよう配慮し、配置日の調整や放課後の打合せの時間の確保等に努める。また、必要に応じて、研修会等に参加し、自身の資質向上に努める。

○教材・教具の共有体制の構築・工夫

指導案や教材・教具については、これまでの実践の積み上げを生かしつつ各校の実態に即して作成するが、ファイルや棚等を利用し、単元や授業ごとに分け、全職員が共有できるよう工夫する。また、実践後の授業者の振り返り等を記録に残し、次年度の実践に向けた改善を進める等、毎年更新・補強していくことが望ましい。

○小・中学校の連携

小学校外国語教育の目標やその実現に向けた各学校の取組が、中学校における外国語教育に円滑に繋がるように、小・中学校の教員が相互に授業を参観したり、合同の研究会を開催したりするなど、外国語教育における小・中学校の効果的な連携に向けた場の設定に努める。

○保護者・地域への発信

小学校外国語教育についての保護者の関心は非常に高くなっている。学級や学校の取組の状況を、懇談会や学校便り・学年便り等、様々な方法で保護者へ発信し、学校の取組への理解に努める。

8 その他

○ホノルル市との姉妹都市交流の効果的な活用

平成29年度より、姉妹都市であるホノルル市の学校との交流事業の在り方を研究するために市内小・中学校の教員各1名がホノルルを訪問し、その中で、手紙やビデオレター等を活用した児童同士の交流を図るなど、子どもたちが「相手意識」を持ちながら取り組める活動が行われている。今後も、両市の学校の子どもの交流事業を進めていく中で、学校教育において、インターネットやビデオレター、メール・手紙等を活用した交流が考えられる。交流を通して、ホノルルの子どもたちに「伝えたいことを伝える」機会をもてることが、本市の外国語教育の特色の一つになることを目指したい。

Q1 ALT を行う授業のポイントは？

A1 ALT に全て任せるとではなく、子どもたちの実態をもっとも理解している学級担任が ALT と一緒に授業を作っていこうとする気持ちを大切にしてください。子どもたちは英語で進められる ALT の授業に不安を感じることもあります。しかし、子どもたちが ALT の言っていることをすぐに理解できない様子があっても、学級担任がすぐに日本語で説明することは控え、何度も繰り返し聞く機会を設けるなど、子どもたちが聞き取ろうとする時間を取ってください。もちろん必要に応じて、例えば、学習活動のルールなど、全児童が押さえるべきポイントなどについては日本語で説明する場面があっても構いませんが、日本語を使って、後で何でも説明することが日常になると、子どもたちが、「どうせ先生が訳してくれるから」と考えるようになり、ALT の英語を聞き取ろうとする姿勢が見られなくなります。

また、ALT は全ての授業に入るわけではありません。前時の授業や次時の授業とのつながりを意識し、例えば、ALT に「街や学校のことなど伝える」ことを目的とした活動を取り入れることにより、英語を使用する必然性が生まれ、「相手意識」を持たせることにより、学習効果の高まりが期待できます。

Q2 授業は全て英語で行わなければならないのですか？

A2 授業者が英語を使って授業を進めることは、教室に、英語を学ぶ雰囲気を作る上で効果的です。しかし、All English で進める必要はありません。授業者は、子どもたちが理解できるように、身振りや表情豊かに、絵や写真なども活用しながら英語を使ってみることが大事です。また、児童からわからないところの質問を受けるなど、やり取りを通して理解させていくこともできます。理解できないからすぐに日本語を用いるのではなく、英語による表現を児童が理解しようとするような授業者の関わり方を大切にしてほしいと思います。ただし、支援を必要とする児童には、その児童が理解できるよう必要に応じて日本語を使用することも必要です。

子どもたちの英語を「聞く力」を育てるには、CD 等の音声教材や ALT を効果的に使うことも大切です。

Q3 英語が苦手な学級担任が授業をしても大丈夫ですか？

A3 学級担任は、英語のモデルスピーカーではなく、英語を使おうとするモデルです。先生方が授業の中で、積極的に英語を使おうとする姿勢が、児童の外国語に対する興味・関心を高める大切なきっかけとなります。

学習者のモデルとして、先生方自身が努力することは大切です。その時の先生方の持っている力で、自信を持って英語を用いて児童に語りかけることを心がけてください。発音や文法の正しさよりも、まずは先生方が、児童に伝えたいことを、丁寧に「言葉」にして伝えようとする姿を見せてください。

Q4 スモールトークがうまくできません。

A4 スモールトークの目的として、既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、対話の続け方に慣れ親しませることの2点が挙げられます。このことから、指導者は児童が既習表現について場面を変えて繰り返し使えるようにすることを意識した指導を行う必要があります。その際、子どもたちが慣れ親しんでいる簡単な表現を用いてシンプルに伝えることが大切です。そこで、Review（復習になる）Envision（次を見せる）Motivate（やってみたい）の3つのことを意識して導入すれば、十分にスモールトークの目的を達成できると考えます。また、必ずしも毎時間、そのような場を設定する必要はありません。ただし、学年が上がるにつれて、導入時に児童同士のやり取りも取り入れていきたいものです。やり取りしながら身に付けていく指導法は、外国語教育における一つの学びのスタイルです。児童にチャレンジさせるだけでなく、教師自身の英語力向上を図るためにも積極的に取り組みましょう。

Q5 学級担任だからこそできる外国語の授業の具体例はありますか？

A5 コミュニケーションをベースとする外国語の授業では、他教科以上に学級の風土が大切となります。学級経営が上手で、学級の風土が良いクラスにおいては、外国語の授業も成立しやすく、その経験を積む中で、どんどん授業が面白くなっていきます。これこそが学級担任が外国語の授業を行う意義となります。具体例として、茅ヶ崎市と姉妹都市であるホノルル市を取り上げた実践や、学校の行事を絡めた実践、これまで学んだ地域の紹介などに係る授業については、学級担任の関わりが大きく反映されるものです。また、日々、共に過ごしている学級担任だからこそ、発問の工夫や、授業改善につながりやすくなったりするなど大きなメリットがあります。

Q6 書くことについてどこまで指導すればよいのですか？

A6 大文字、小文字の活字体で書くことができるようにすること、また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができること、自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くこと、と示されているように、あくまでも書き写したり、例文を参考にしたりする程度です。また、語順に気付かせるための工夫としては、板書やワークシートなど、視覚的にわかりやすい形で提示することが大切です。日本語との違いに気付かせるためには比較対照しやすい形で児童に提示し、ペアやグループ活動で分析させるような活動を通して構造の違いに主体的に気付かせるような学びにすることが大切です。

書く活動を取り入れる上で重視したいのは、音声で十分慣れ親しんだ語や文を書くということです。音声言語としての能力が十分に育っていない状態で文字指導を始めても「百害あって一利なし」です。外国語科が小学校における新たな教科として実施されることが、中学校における学習の前倒し化となることは避けなければなりません。英語を使える日本人の育成を目指すためには、小学校段階における音声を中心とした言語活動の充実が大切です。